

に小大進

なつ山のしげみがしたの思ひぐさ露しらざりつこゝろかくとは、なごき、侍し、くちとく歌などをかしくよみて、いづみ式部などいひしもの、やうにぞ侍し、伊豫のごとて侍しも、中院の大將源雅定のわかくおはせしほどに、ものなどのたまひでのちには、やましるとかいふ人に物いふとき、給ひて、さきにも申侍りつる、みとせもまたでといふ歌よみ給へりしぞかし、かやうにいろこのみたまへるごたち、おほくこそきこえ侍しか、

〔吾妻鏡 二十〕建曆二年五月七日辛酉、相模次郎朝時主、依女事蒙御氣色、嚴閣又義絶之間、下向駿河國富士郡、彼傾公、去年自京師下向、佐渡守親康女也、爲御臺所官女、而朝時耽好色、雖通艷書、依不許容、去夜及深更、潛到彼局、誘出之故也云云、

〔太平記 二十六〕執事兄弟奢侈事

夫富貴ニ驕リ、功ニ侈テ、終ヲ不愼ハ、人ノ尋常皆アル事ナレバ、武藏守師直、今度南方ノ軍ニ打勝テ後、彌心奢リ、舉動思フ様ニ成テ、仁義ヲモ不顧、世ノ嘲哂ヲモ知ヌ事共多カリケリ、○中月卿雲

客ノ御女ナドハ、世ヲ浮草ノ寄方無テ、誘引水アラバト打侘ヌル折節ナレバ、セメテハサモ如何

セシ、申モ無止事、宮腹ナド、其數ヲ不知、此彼ニ隱置奉テ、毎夜通フ方多カリシカバ、執事ノ宮回ニ、

手向ヲ受ヌ神モナシト、京童部ナンドガ咲種ナリ、加様ノ事多ガル中ニモ、殊更冥加ノ程モ如何

カド覺テ、ウダテカリシハ、二條前關白殿ノ御妹、深宮ノ中ニ被冊、三千ノ數ニモト思召タツシヲ、

師直盜出シ奉テ、始ハ少シ忍タル様ナリシガ、後ハ早打顯レタル、振舞ニテ、禪ル方モ無リケリ、角

テ年月ヲ經シカバ、此御腹ニ男子一人出來テ、武藏五郎トジ申ケル、

〔細川頼之記〕九月○貞治六年初ヨリ、義詮○足利御病惱ノ事外ニ聞ヘテ、天下ノ名醫ヲ召シテ、様々治

術ヲ盡サセケレドモ、病日々ニ重リテ、其驗ナカリケリ、其病ヲコロシテ尋ルニ、夜晝ライハズ、淫